

遊びを生み出す子どもの力② 遊びの広まり

認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク
三浦忠士

前回のレポートでは、子どもが他者や社会、自然と関わることで、新しい遊びを次々と生み出していく力のありようを報告した。今回はこのように生み出された遊びが、子どもたちのあいだで絶えず姿を変えながら広まっていく事例を報告する。そこでは年上の子どもがはじめた「基地」をつくる遊びが、かたちを変え続けながら年下の子どもたちに広まったり、双方が交じり合ったかたちで楽しめる遊びに変化していった。

今回報告するのは、筆者が所属する「認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク」（以下「冒険あそび場ネット」と記載）の主催するプレーパーク「久保田東あそび場」において観察された事例である。「久保田東あそび場」は、東日本大震災によって被災した仙台市沿岸部六郷地区の住民の防災集団移転先にある久保田東3号公園にて、現在月2回の頻度で開催されている。この集団移転先は仙台市が2013年より造成を開始し、2015年から引き渡しの始まった新しい宅地である。被災者が移転しなかった空き区画には2017年から一般住宅も建てられ、他の地区からの転入も進んでいる。「冒険あそび場ネット」はこのような異なる地域から転入してきた住民同士がともに暮らす地区での、遊びを介した交流の場づくりを目指し、2017年7月より「久保田東あそび場」を始めた。前回のレポートで紹介した「ふるじろプレーパーク」と同様、子どもが自発的に自由な遊びを実現できるようにするため、開催時は「冒険あそび場ネット」のプレーリーダー2名に加え、自由に使える遊びの素材や道具を満載した自動車「プレーカー」を派遣している（図①）。この地区は仙台平野に広がる田園地帯に隣接しているため、そこで出会える多様な生き物と触れ合う遊びを子どもが楽しむための拠点としても、「久保田東あそび場」は機能している（図②）。様々な水生生物と触れ合うことのできる農業用水路については、水難事故を懸念して子どもだけで遊びに行くことに難色を示す地域住民が多い。これを受けてプレーリーダーがほどよい距離感で見守るかたちで、子どもが水路で遊びやすい状況をつくる取組みもしている。

今回取り上げるのは、2023年11月12日（日）10:00



～16:00 に開催された「久保田東あそび場」において筆者が出会った事例である。この日の仙台の風は最大 8.3m/s とやや強く、最高気温は 10.2°C だったが体感気温はそれよりも低く感じた。これを受け、バーベキューコンロで炭火を焚いて、暖をとれるようにした。後半は小雨もばらつき、それを受けてシートで応急の屋根を張った。

こんな状況であったのに加えて、近隣の六郷市民センターで子どもたちも数多く参加する「六郷市民まつり」が開催されていたこともあり、この日の子どもたちの出足は鈍かった。はじめの1時間ほどは常連の小学校低学年の男の子 A だけが遊びに来て、プレーリーダーと火を囲んでおしゃべりをしたり、好きな工作を「プレーカー」に積んでいる素材や道具を使って楽しんだりしていた。昼が近づいてきたころ、「六郷市民まつり」に遊びに行っていた A の友だちの B をはじめとする小学校低学年の子どもたちや未就学児、その保護者たちが顔を出した。子どもたちは A と一緒に工作をはじめ、保護者たちはそれを見守りながら井戸端会議に花を咲かせたり、一度家に帰って子どもたちのためにお菓子を持ってきたりした。火を焚いていたからだろう。子どもたちが焼いて食べられるようにと、ウィンナーをもってきた保護者もいた。プレーリーダーはこの日はサツマイモを持ってきていたのでそれも火で焼いて、お昼に他の持ち寄られた食べ物とともにみんなで分け合って食べた。

そんななか B が、著者に「ブルーシートを貸して」と頼んできた。「プレーカー」にブルーシートを積んでいるので自由に使っていいと伝えたあと、どういう風に使うのだろうと見ていると、公園のベンチの下に敷き始めた。そのあとベンチの上にもブルーシートを被せた。さらに遊びの素材や道具を入れていた入れ物を重ねて、ベンチの側面のうち風上にあたる方も塞いだ (図③)。



B がこの遊びを始めた背景の一つに、つよい風が寒いと感じて、それを避けたいという思いがあったと考えられる。だからこそ風上に当たる部分を入れ物で塞いだのだろう。また、このベンチは背もたれや座面にスリット状の隙間が一定間隔で空いており、上から被せたシートはそこから風が吹き込むのを防いでいた。また、そんな寒さ対策とは別に、2023年10月23日(月)に開催された

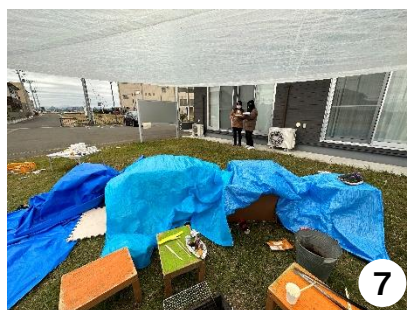


された前回の「久保田東あそび場」での出来事も、作用していたかもしれない。この日は小学校高学年の男の子 C が同じベンチの下にシートを敷いて、「俺だけの基地」にして他の子どもを入らせなかった (図④)。なお、この日は最高気温が 22°C と高く、ベンチの上や側面をシートで塞ぐということはしなかった。ベンチを日除けにしながらか側面やスリットから風が吹き込むようにして、「基地」の居心地をよくしようと C は考えたのかもしれない。この日は B も遊びに来ていて、この「基地」に興味を示して入ろうとしたが、C に入れてもらえなかった。これを受けて B は、この日は同じ小学校低学年の友だちとともに、「プレーカ

一」に積まれていたジョイントマットとブルーシートで自分たちの「基地」をつくった(図⑤)。この出来事を受けて抱いた思いもあって、Bは11月12日(日)に同じベンチに「基地」をつくらうとしたのではないだろうか。この日はCは「六郷市民まつり」に行っており、Bがこの「基地」をつくった時間帯は「久保田東あそび場」に来ていなかったため、「このスキに」という思いもあったのかもしれない。

しかしながらBは、このベンチの「基地」を早々に放棄する。風はある程度防いだものの、寒さを十分にしのぐことはできなかったようだった。火でお湯を沸かして家から持ってきたカップラーメンをつくって食べ、体を温めた。その後Bは、火に熱心に薪をくべていたが、ふと思いついた様子で火のそばにジョイントマットとブルーシートで「基地」をつくり始めた。お湯を沸かすときに火の暖かさを感じて、そのそばに「基地」をつくれれば寒さをしのげると考えたのかもしれない。これを見てBの友だちであるAたちも、同じような「基地」を火を囲むようにつくった。その後もBたちは「基地」に改良を加えていった。はじめ、これらの「基地」は一人しか入ることができないかたちをしていたが(図⑥)、やがて3人入れるかたちつくり変えた(図⑦)。この「基地」の改良版が完成すると、子どもたちは自分たちのつくった工作の作品やお菓子を持ち込み、おしゃべりしながら楽しそうに過ごしていた。そのうちにもっと「基地」をよくできるかもしれないアイデアが浮かんだのか、ブルーシートを外してジョイントマットの新たな組み合わせ方をあれこれ試し始めた(図⑧)。

Bたちがそんなことをしたり、火を囲んで新たに焼き上がったイモを食べたりしているうちに、「六郷市民まつり」が終わってCとその友だちの小学校高学年集団が「久保田東あそび場」にやってきた。はじめは火を囲んでプレーリーダーとおしゃべりしていたが、やがてCも含めた小学校高学年の一部はBたち低学年集団のつくった「基地」が気になったのか、中に入るなどちょっかいを出し始めた。Bたちはこれを受けて「基地」に使っていたブルーシートを自分の体に羽織



ったり、Cたちに対抗するように「基地」の中に入ったりし始めた(図⑨)。そんな両者のあいだの雰囲気は、決して険悪なものではなかった。これまで継続して開催してきた「久保田東あそび場」において、両者は様々な遊びをともに楽しむなかですっかり顔なじみとなっており、「基地」やその材料を奪い合うというよりは、陣地とりゲームのようにじゃれ合う遊びに変化していき、両者の顔から笑顔が消えることは無かった。なお、BがCのつくった「基地」に入れてもらえなかった10月23日(月)の「久保田東あそび場」においても、最後に女子チームと男子チームに分かれてサッカーをしようという話になり、BもCも同じ男子チームとして、女子チームに挑んだ。女子チームの巧みなボールさばきに男子チームが圧倒される展開となったが、BもCも終始楽しそうにボールを追いかけていた。

このような「基地」的なものをつくる遊びは、遊び手を変えながらその後の「久保田東あそび場」でも引き続き楽しまれていった。2024年1月8日(月)には、小学校高学年の女の子Dとその友だちが、「プレーカー」に積まれていた段ボール、ブルーシート、工作台、ジョイントマットを使って「家」をつくった(図⑩)。筆者はこれまでDたちが「家」づくりをして遊ぶ場面に出会ったことはなかったが、BやCが「基地」づくりをするところをDたちは目撃しており、それを見て自分たちもやってみたいという気持ちが芽生えていたのかも知れない。Dと友だちは相談しながら、段ボールを四方を囲む壁として用い



つつ、ブルーシートは床、工作台は椅子、ジョイントマットは屋根といった具合に使う「家」をつくり上げていった。この日は最高風速こそ8.4m/sと、2023年11月12日(日)と同程度だったものの、日中の最高気温については3.2°Cと、7°C低い日だった。このためDは「家」のなかに毛布も持ち込んで、その保温性を向上させていた(図⑪)。この日は気温が低いことを懸念して、公園に隣接する久保田東町内会の集会所も借りて「久保田東あそび場」を開催していた。なかに遊びの素材や道具も運び込んだ上で暖房を入れて、温まりながら遊べる環境をつくっていたのだが、Dとその友だちについては「家」の居心地がよほどよかったのか、それつくるのに夢中だったのか、集会所のなかで遊ぶことはなかった。



2024年1月22日(月)に開催された「久保田東あそび場」においては、Dが友だちと引き続き「家」をつくる遊びを楽しんでいた他、2023年11月12日(日)にBとともに「基地」づくりをしていたAが、別の友だちと2人で、「基地」づくりを楽しんでいた。この日はまず、Aたちが「基地」をつくり始めた。この日は以前のようにジョイントマットを使うということはず、プレーカーに積まれていることに気づいた段ボールとブルーシー

トを使って「基地」をつくっていった。集会所の壁面も壁の一部として活用しながらV字型にした段ボールを置き、それにブルーシートを被せて屋根とした(図⑫)。段ボールにコの字型の切り込みを入れて窓にして、外をのぞいたり物を出し入れしたりできるようにもしていた。DはこのようなAたちの様子を見て「私たちもつくろう」と友だちに声をかけ、一緒に「家」をつくり始めた。L字型にした段ボールを壁、ジョイントマットを床にして、あとは屋根をつくるだけというところまで試行錯誤しながら進めていった(図⑬)。雨が降り始めて段ボールが濡れてしまったり、友だちも習い事で帰ってしまったりしたこともあってか、Dは「家」づくりを途中でやめてしまったが、Aたちの「基地」づくりの影響も受けながら、2024年1月8日(月)のものとは異なる新しいかたちの「家」をつくりつつあった。



今回のレポートでは、「久保田東あそび場」で展開された「基地」をつくる遊びにスポットを当て、その推移を追ってきた。10月の時点では、ベンチの下にシートを敷くだけだったこの遊びは、他者とのやりとり、季節の移ろいやそれにともなう気候の変化、新たな素材との出会いなど、さまざまなことをきっかけとして、かたちを変えながら子どもたちのあいだで広まっていった。子どもたちはそのなかで、他者とのかかわりや季節、素材に関する経験を自ずから深め、自らを育てていった。また、ときとしてこの遊びは、年上・年下が世代を越えて遊ぶ機会を生み出し、そのあいだに新たなきずなのタネを蒔くこともあった。遊びを生み出す子どもの力は、このように自らを育てたり、他者とのきずなを育む機会もまた、生み出すのである。